

物語理解における恐怖の生起メカニズム

—怪談とメタファー—

楠見 孝

物語理解における恐怖の生起メカニズム

—怪談とメタファー—

楠見 孝

1. はじめに：恐怖の心理

本研究の目的は、認知心理学の観点から、(a)読者が物語を理解する際に、恐怖が起こる心理的メカニズム、(b)恐怖を喚起する物語の理解過程、(c)恐怖の心的状態の慣用句、擬態語、メタファーを用いた表現について、検討することである。

1.1 恐怖の心理的メカニズム

恐怖と物語 恐怖とは、心理的に人にもっともダメージを与えるネガティブな感情である (e.g., Ekman & Friesen, 1975; Öhman, 2000)。それにもかかわらず、人は怪談を読んだり、ホラー映画を見たりすることを好む。こうした怪談には、東西の古典から現代の都市伝説に通じる時代や文化を越えた類型性がある (たとえば、小松, 2003)。たとえば、逃走譚 (山姥の民話、『ヘンゼルとグレーテル』) や一夜の契り (『雨月物語』、中国古典『金の枕』) などは、類似した物語を持っている。このことは、怪談への好みは、洋の東西や時代を越えて存在していたことを示唆する。そのほかにも、人が、死亡事故や殺人事件に高い関心をもつことは、これらについてのマスコミのセンセーショナルな報道やこれらの視聴率の高さにみとることができる。

恐怖の対象 このように、人が恐怖を引き起こす物語に強い関心をもつことの背後には、生物が危険を回避し、生存するための心理的メカニズムがある。私たちにとって、恐怖の対象となるのは、怪異 (例：妖怪、幽霊)、危険な状況 (例：断崖、高所)、人 (例：暴漢)、動物 (例：蛇)、物 (例：凶器)、観念 (例：死) などがある。これらは、生命・身体・心理にダメージを起こす対象である。こうした恐怖の対象は、子どもから大人になるにつれて変化 (たとえば、子どもはお化けを恐れるが、大人になると恐れなくなる) し、個人差もある。極端な場合が、恐怖症という神経症の一種である。

恐怖の時間経過 恐怖は、不安や驚きを含む時間的な感情の変化を含んでいる (e.g., Apter, 1992; Ekman & Friesen, 1975; Öhman, 2000)。

第一段階は、危険に先立って、不吉な予感や不安が徐々に高まる段階である。

第二段階は、危険の出現と同時に驚きの感情が生起する段階である。時には、第一段階がなく、恐怖対象の出現が不意打ちで、状況が不明の場合もある。

第三段階は、逃走や回避を試みる段階である。

第四段階は、逃走や回避を試みても、身動きがとれず、逃げられない段階であ

る。ここでは、身体が硬直し、恐怖が増大する。

第五段階は、危険が去った後の段階である。恐怖の対象から逃げたり、危険に対処できたり、危険が去った後には、ほっとし、ある種の幸福感や、高揚感を味わうことがある。時には、恐怖の感情が消失せずに残り、第二段階では十分に理解できなかった状況を理解した上で、怖かった経験を追体験することもある。スリルとしての快感はこの時に起き、そのため、人は、さらに、恐怖を求めて、挑戦することがある（たとえば、登山家がさらに、危険な氷壁に挑むことが当てはまる。怪談であれば、再読したり、他の怪談を読んだりすることになる）。

恐怖と刺激追求行動 人が恐怖を味わうことを求める行動は、刺激を求める行動（Zuckerman, 1994）として捉えることができる。Zuckermanは、刺激追求尺度の下位尺度として、スリルや冒険の追求、体験追求を挙げている。そして、刺激追求傾向の高い人は、ホラー映画を好んでみて、恐怖場面への順応が速いことを報告している。

ここで、刺激の追求は、危険（リスク）を求める行動としても位置づけることができる。楠見（1995）は、危険を求める行動として、質問紙調査によって、大きく3類型を明らかにしている。

第一は、身体的恐怖を引き起こす身体的刺激追求行動である。これは、生命や身体の危険に関わる。たとえば、ジェットコースターに乗ったり、バンジージャンプをしたり、スピードを出して車を運転したりすることが当てはまる。これらを実際におこなうことを好む人もいれ

ば、サーカスの曲芸を見たり、冒険小説を読んだりすることを好む人もいる。

第二は、心理的恐怖を引き起こす心理的刺激追求行動である。怪談を読んだり、お化け屋敷に入ったり、肝試しをしたりして、身体的危険がない心理的スリルを味わうことが当てはまる。万引きなどの犯罪常習者は逮捕されるスリルが快感になっていることも考えられる。

第三は、財産を損失するかもしれない経済的恐怖を引き起こす金銭的リスクイク行動である。多額のお金を賭けるギャンブルは、利得か損失かの不確実性がスリルを高めている。実際にギャンブルをしない人でも、多額のお金を賭けるクイズ番組をみるのが好きな人は多い。なお、金銭的リスク志向は、身体的リスクや心理的リスク志向とは、独立している。すなわち、怪談を好む人やバンジージャンプを好む人と、ギャンブルを好む人は、異なることが考えられる。

1.2 恐怖物語の理解

怪談を好む理由 1.1では、人が、恐怖に強い関心を持つ背景には、人が安全を求めて危険回避するとともに刺激を追求する傾向があることを示した。そこで、これらの2つの相反する傾向性に基づいて、人が怪談を語り、享受する理由を検討する。

第一は、生命の危険を回避するために、代理経験を教訓として生かすことである。体験談に基づく怪談の形で、危険な場所や行為をとると危険な目に遭うことを、集団や家族内の年少者に知らせることである。たとえば、お化けが出ると言うことで、夜間に危険な場所に入るこ

とを禁じることになる。怪談の一部は、集団内で伝承されてきた禁止に関わる。

第二は、怪談を読むことによって、刺激を得て興奮し、退屈から脱却することである。これは、物語理解全体と共通するが、主人公や他の登場人物と一体化する感情移入（共感など）が自己代償体験において重要な役割を果たしている。とくに、怪談の場合、読者は当事者でないので興奮できる。つまり、本を閉じれば現実の安全な世界に戻れるのであって、実際に生命や身体の危険はない（e.g., Apter, 1992）。

読解過程 怪談を含むこうした読書における心理過程を、Apter（1992）の危険に関する理論を適用すると3つの異なる過程に分けて考えることができる。

第一は、先に述べた登場人物への感情移入、没入である。これは、読書中に起こる過程である。第二は、空想である。これは、読書中または読後に起こる過程である。物語の展開をたどることから離れて現実が起こったらとんでもない恐ろしいことを思い浮かべ、刺激を受けたり、興奮したりすることである。第三は、追想であり、読後に、読んだ物語の怖いシーンを思い出すことである。怖いシーンはいつまでも記憶に残りやすく、繰り返し想起されることがある。

ここで、第一に挙げた登場人物への感情移入によって、読者が、怪談の読解中に興奮を感じる心理過程について、さらに検討する。Apter（1992）の危険のエッジ（淵）の考え方に基づくと、私たちの活動は、図1で示すように、安全なゾーン、危険なゾーン、そして生命や身体にダメージを受ける外傷ゾーンに分け

ることができる。そして、外傷ゾーンと危険ゾーンの境界が危険のエッジである。この危険のエッジの手前に、安全柵であるプロテクティブ（防護）フレームがある。たとえば、人は、観光地の断崖に訪れた際に、断崖から離れた安全ゾーンでは退屈である。断崖に近づくと興奮が高まるが転落の危険が高まるため、恐怖の感情が起こる。しかし、安全柵があればその内側からは安心して危険な淵まで近づいてスリルを味わうことができる。怪談の理解の場合に当てはめると、図1のAは、登場人物が危険ゾーンから、お化けが出そうな外傷ゾーンに近づき、不安を感じ、その危険を避けたことで興奮を感じる。さらに、図1のBでは、登場人物は外傷ゾーンに入って、お化けに襲われて、恐怖を味わい、危険ゾーンに戻って、興奮を感じるプロセスを示している。ここで読者は、分離フレームの中にいる。3つのゾーンとプロテクティブフレームが現実世界のものであったのに対し、分離フレームは、現実世界から切り離された読者や視聴者、観客の心理的状態である。読者は、分離フレームにおいて、登場人物と一体化し、感情移入して、恐怖を味わうことになる。

すなわち、怪談を読むことは擬似的感情（parathetic emotion）であり、読者は現実の恐怖でないというフィクションとして認識することが重要である。しかしこれは、偽の感情ではなく、主人公が恐怖を感じている時には、本当に恐ろしさを感じている。読者は、主人公への共感をもつため、同じような気持ちになり、何か変だという違和感や何かが起こ

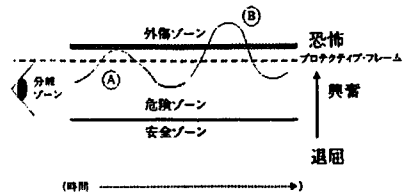


図1 読者の位置と怪談の時間進行 Apter (1992) を怪談読解に即して改変

そうだという予感や不安を感じたりする。とくに、怪談の特徴として、不確定性やサスペンス（未決感）（水藤, 2005）が、違和感や予感を高めると考えられる。そのプロセスについて、つぎに実験データに基づいて検討していく。

2. 恐怖物語の理解過程

ここでは、恐怖を引き起こす物語として、ミステリーを取り上げてその理解過程を検討する。

2.1 読解実験

読解における感情の役割として、Miall (1989) は3つを挙げている。

第一に、感情は領域横断的 (cross-domain) である。ひとつのスキーマで理解できないときは違和感が生じ、別の解釈をしようとする。第二は、感情は予測的であり、読者は予感によって先の展開を予測する。第三に、感情は自己準拠的 (self-referential) である。つまり読者は、登場人物に感情移入をし、共感が生じる。実験では、これらの3つの感情の役割と恐怖などの感情がどのように起こるかについて検討した。

読解実験では、実験参加者の大学生29名に、短編ミステリー「逢いびき」（石

川喬司著）を一部改変した材料を読んでもらった。文の数は、94文である。

まず29名の大学生には、物語を一文ずつ読みながら、各文にどのくらい共感したか（10名）、どのくらい先の展開の予感を感じたか（10名）、どのくらい文に違和感を感じたか（9名）をそれぞれ5段階（1：あてはまらない-5：あてはまる）で評定を求めた。また、物語の前半を読み終えた時と、後半を読み終えた時に、7種類の感情（怒り、嫌悪、不安、喜び、悲しみ、恐怖、驚き）について7件法（1：まったくあてはまらない-7：非常にあてはまる）で評定を求めた（米田・平・常深・楠見, 準備中）。

「逢いびき」のあらすじは、前半部は、「逢いびきにはもってこいの静かな場所」で「ほくの膝には、紀子さんが坐っている」場面から始まる。そこで、第三の男が現れ、主人公が動揺するところで前半部が終わる。

後半は、待っても待っても紀子さんは来ないで、「ほくとのデートをすっばかしつづけた」。そして、最後の場面で女の子が男と現れる。「二人は愛しあう」。そして、男が「享年十七歳」という墓碑銘を読む。最後の段階で、主人公はお墓であり、「逢いびき」の場所が墓地であって、紀子さんはそのお墓にいつも坐っていたことがわかる。

図2(a)は、ある読者における共感の程度の変化を、初読時と再読時で示している。共感の度合いは、冒頭では低いが、後半に読み進むにつれて高くなる。これは、再読時にも同じ傾向が見られる。また、共感評定を行った参加者全体の平均データもほぼ同じ傾向であった。

図2(b)は、ある読者における予感の程度を示す。初読、再読時とも、予感の程度は、前半に比べ後半が高くなっている。ただし、全体の平均データでは、前半-後半、初読-再読の差は小さかった。

図2(c)は、異なる読者における文に対して感じた違和感の程度を示す。初読時は、主人公が墓の中にいることを暗示する伏線の文は、家族関係が論理的でなく

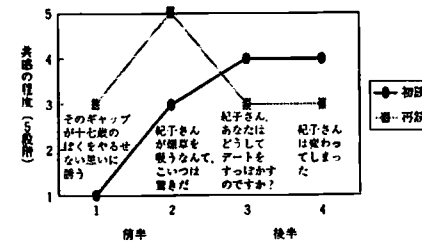


図2(a) ある読者Jにおける前半と後半における共感の推移

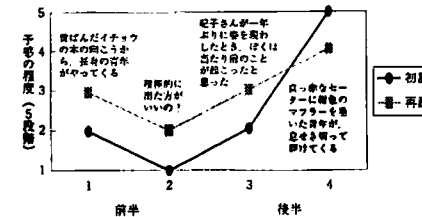


図2(b) ある読者Jにおける前半と後半における予感の推移

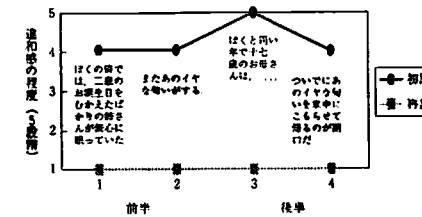


図2(c) ある読者Dにおける前半と後半における違和感の推移

(2歳の姉や同い年の母)、唐突に「イヤな匂い」について記述しているため、前半後半とも一貫して違和感が高い。しかし、再読時には、主人公が墓の中にあることがわかったため、姉や母が早世したことや線香の匂いであることがわかり違和感は解消している。全体の平均データでは、前半-後半の差は小さいが、初読に比べて、再読では違和感が低下した。

また、前半読了時と後半読了時の感情の平均評定値は、恐怖（それぞれ前半後半で $M=1.86, 2.86$ ）、驚き ($M=3.48, 5.41$)、悲しみ ($M=2.10, 4.31$) といずれも後半読了時の方が有意に高かった。

2.2 読解における感情の役割

第一に、ミステリーの読解において、主人公への共感、図2(a)で示すように、物語の展開に伴って高まる。また、共感の評定値は、再読時においても高い。これは、読者が小説を反復して読んでも共感の度合いは低下せず、時には、上昇することを示している。

第二に、予感、図2(b)で示す読者は、物語の終盤に向かって高まっているが、物語全体を通して、コンスタントに高い読者もいた。また、再読時にも共感、低下していなかった。このことは、読者は、再読時には、展開や結末を知っていても、予感を感じつつミステリーを読むことを示している。

第三に、読解における違和感、主人公が墓の中にいることを暗示する伏線に対して感じる（図2(c)）。読者は、物語を主人公と紀子さんの恋愛小説として読みながら、伏線の文が繰り返し現れることによって、何か変だという違和感を持

ちつつ読解を進める。そして、結末で、主人公が墓であることを知って、伏線が整合的に理解できて、違和感が解消する。したがって、再読時には、主人公が墓であるというスキーマをもって読むため、伏線の意味がよくわかり、違和感は小さい。同じミステリーを用いた別の実験(米田・仁平・楠見, 2005)に参加した者の読後の感想では、「はじめはよくわからなかったが、最後まで読んで主人公はお墓にいるのだと思った」と報告したように、このミステリーは結末まで読んで伏線の意味がわかる構成を持っている。

今回実験で取り上げたミステリーでは、前半部に比べて、後半部の読後で、驚き、恐怖、悲しみが高まった。この作品は、主人公の恐怖ではなく、読者自身の恐怖や驚きを喚起する作品であった。したがって、主人公が恐怖を経験する作品についても今後検討の必要がある。

3. 恐怖の言語表現

ここでは、物語において登場人物の恐怖の生起過程や心理状態の変化をどのように、記述、説明し、読者に伝えるかについて検討する。ここでは、身体語彙、擬音語・擬態語、メタファの3つにわけて検討する(楠見, 1996)。用例は感情心理学文献(Ekman & Friesen, 1975)、認知言語学文献(Kövecses, 2000: 2005)、擬音語擬態語辞典(飛田・浅田, 2002)、感情表現辞典(中村, 1992)から収集した。

3.1 恐怖の身体語彙

第一は、身体に基づく語彙であり、恐

怖による表情、姿勢、内臓、部位の変化を描写した換喩(metonymy)によるものである。多くは慣用句となっている。

恐怖による表情変化は、顔の筋肉や色の変化にみられる(eg. Ekman & Friesen, 1975)。その表現例を(1)に示す。

- (1) a. 顔を引きつらせる
- b. 目に恐怖の色が漲る、目を見開く
- c. 唇がこわばる
- d. 固唾をのみ
- e. 真っ青な顔、蒼くなる、唇が青ざめる
- f. 血の気の失せた顔、顔色を失う、蒼白になる
- g. 髪の毛が真っ白になる

恐怖による姿勢の変化は、筋肉の緊張や震えとして(2)のように記述される。これは恐怖による皮膚上の防御反応、筋緊張である。

- (2) a. 身をすくめる、足がすくむ
- b. 堅くなる
- c. 身震いする、わななく
- d. 歯の根もあわぬ

恐怖による身体部位の生理的变化としては、(3)のような体温の低下に関わる表現がある。

- (3) a. 身の毛がよだつ、鳥肌がたつ
- b. 悪寒が走る、戦慄が走る
- c. 冷や汗をかく
- d. 肝を冷やす

恐怖による興奮に関わる生理的变化として呼吸や心拍の増加、さらに停止、失神、失禁に関わる表現が(4)である。

- (4) a. 心臓、脈が速くなる
- b. 息が詰まるような
- c. のどを締め付けられるような
- d. 血が逆流したかのような

- e. 全身の血が止まるような
- f. 心臓が止まる
- g. 気絶する
- h. おしっこを漏らす

3.2 恐怖の擬音語・擬態語

第二は、恐怖の擬音語、擬態語(擬情語)である。息や心拍などの身体的な音を言語音に移した擬音語に近い表現と、恐怖という心理状態を象徴的に表現した擬態語がある。これらは大きく4つに分けることができる。

(5)に示すのは悲鳴や息に関する擬音語である。唇をこわばらせて、息を吐くとき、吸い込む時に出る音である。

- (5) a. ひゃー、ひー、ひーっ
- b. ひーひー
- c. ひっ

(6)は震えの擬態語である。身体語彙の(2)に対応する。a-cは、寒さによる震えと共通する。cそして、とくにdは大きな震えを示す。

- (6) a. ぶるっ、ぶるぶる、ぞくぞく
- b. びくびく
- c. がたがた、がくがく
- d. わなわな

(7)は冷たさによる体温低下の擬態語である。身体語彙の(3)に対応する。aは「ぞくっと」はやや小さい恐怖で、「ぞーっと」は誇張型である。bは、回想によって恐怖経験を思い出すときによく使う。

- (7) a. ぞくっと、ぞっと、ぞーっと
- b. 冷や冷や、ひやり

(8)は興奮による心拍、脈拍の増加や停止を示す表現である。身体語彙の(4)に対応する。aは心臓の鼓動を示している。

「どきり」などは1回強く鼓動したことを示し、驚きも示す。「どきどき」は強い鼓動の反復であり、緊張や興奮や不安も示す、bは悪いことの予感に基づく怖れであり、不安を示す。cとdは緊張や驚きも表す。とくにdは一瞬息が止まるような緊張を示す。

- (8) a. どきり、どきっ、どきん、どきどき
- b. はらはら
- c. びくっ
- d. はっと

これらの擬態語表現では、「ぞくっ」「どきっ」などが瞬間的な驚きをとまなう恐怖を示すのに対して、「ぞくぞく」「どきどき」などの反復型は、持続的な恐怖やその予感や回想を示す。

3.3 恐怖のメタファ

恐怖のメタファは、恐怖に固有のメタファと感情一般に共通するメタファがある(Kövecses, 2000, 2005)。さらに、恐怖を引き起こす状況を想起させる類推によるメタファがある。

第一の恐怖に固有の表現は、恐怖を隠れた敵あるいは超自然的対象でたとえて、恐怖を襲ってくるもの、戦って克服するものとしてとらえる。

(9)恐怖は隠れた敵/超自然的対象である

FEAR IS A HIDDEN ENEMY
/SUPERNATURAL BEING

- a. 恐怖が忍び寄ってきた
- b. Fear slowly *crept up on* him.
- c. 恐怖と戦う／を克服する
- d. 恐怖が私をとらえた
- e. He was *haunted by* fear.

f. 恐怖に飲み込まれる

g. 恐怖が襲う

第二の感情一般に共通する恐怖の概念メタファには以下のものがある。

(10) 恐怖は人を苦しめるものである

FEAR IS A TORMENTOR

a. 恐怖に苛まれる

b. My mother was *tormented* by fear.

(11) 恐怖は狂気である

FEAR IS INSANITY

a. 怖くて狂いそうだ

b. Jack was *insane* with fear.

(12) 恐怖は重荷である

FEAR IS A BURDEN

a. 恐怖がのしかかる

b. Fear *weighed* heavily on them

(13) 恐怖は乖離である

THE SUBJECT OF FEAR IS A DIVIDED SELF

a. 恐怖で生きた心地がしなかった

b. I was beside myself with fear.

(14) 恐怖は容器内の液体である

FEAR IS A FLUID IN A CONTAINER

a. 恐怖で一杯になった

b. The sight *filled* her with fear.

(14)は、「怒り」や「悲しみ」などにも用いることができる。感情を身体容器における液体ととらえ、その液体があふれたり、温度が下がることで示す。

Kövecses (2000, 2005) が挙げた(9)-(14)の恐怖のメタファは、日本語にも類似の表現があり、身体を基盤とした感情メタファの文化や言語を越えた普遍性を示唆している。

第三のタイプの恐怖のメタファは、恐怖を引き起こす状況を記述して、読者に

その身体経験を類推的に想起させる方法である。これらは、「のような」と明示的に状況を表現した直喩である。一方、(9)-(14)は比喩指標がない隠喩である。

恐怖に類似した身体経験を引き起こす状況として、(15)は落下の恐怖、(16)は体温を低下させる出来事を記述している。

(15) 落下

a. 崖縁に足を踏み出すような

b. 深い井戸へ落下していくような

(16) 体温低下

a. 総身に冷水をあびせられたような

b. 水落のあたりをずっと氷の棒でも通るような

(17)は、悪魔や怪物、お化け、妖怪に襲われる場面をとえとして用いる表現である。

(17) 悪魔や怪物による恐怖

a. 悪魔の息づかいが聞こえるような

b. 得体の知れない怪物が闇に潜んでいるような

以上見てきたように、恐怖の心的状態は、身体に関わる慣用句、擬態語、メタファで表現される。これらの理解を支えているのは、34で述べる生理的変化を基盤とする感情に関する知識である。

3.4 感情の知識と素人理論

恐怖表現の理解は、心の中の感情の動きに関する知識によって支えられている。この知識は、感情の生理学というよりは、個人の経験に基づいて形成された素人理論、通俗理論、素朴理論である。こうした知識は、物語に記述された他者の感情を理解し、その行為を予測する際に重要な役割を果たしている。また、自分の感情を他者に、表現し、説明する際

にも働いている(楠見, 1996)。

感情に関する知識は、恐怖を引き起こす出来事に関する知識と生理的変化に関する知識に分かれる。

恐怖を引き起こす出来事に関する知識は、1.1で述べた恐怖の対象と時間経過に対応する。これは、スクリプト(台本)のような典型的なシナリオを持っている。Lakoff (1987) は怒りのシナリオとして、5段階(不愉快な出来事、怒り、統制の試み、統制喪失、報復行動)を挙げている。さらに、Kövecses (2005) は恐怖の典型的なシナリオとして、怒りと類似した5段階(危険、恐怖生起、統制の試み、統制喪失、脱却)を挙げている。しかし、恐怖のシナリオには1.1で述べたように、予感の段階や回避の成功や失敗による段階を含める必要がある。したがってそのシナリオは下記のように考えることができる。

I. 危険予感

II. 危険発見

III. 回避、克服の試み

IV. 回避失敗→恐怖喚起

V. 回避成功→安心、高揚感

人がもつ恐怖のシナリオの各段階には、以下のような生理的な変化や心理的变化が起こるかという知識も含まれる。

I. 危険の予感によって、不安が高まり心拍数が上昇し((4)a)、身体の震えがはじまる((2)c, (6)a-c)。

II. 恐怖を引き起こす危険な出来事が出現し、驚きとともに、戦慄が走り((3)b)、心臓が大きく鼓動し((8)a)、一瞬息や姿勢が止まる((4)b-f, (8)c-d)

IIIとIV. 逃げようとするが、身体が硬直して対処できないと、表情も硬直し

((1a-f)、失神する((4)g-h)。

V. 回避できた場合や恐ろしい出来事が過ぎ去ったときは、恐怖が低減し、安心する。

こうした恐怖による身体的変化に関する知識は、自分の直接経験と物語やマスメディアなどから得た間接経験に基づいている。これらは、生理学的事実と対応していることが多い。しかし、「恐怖で髪の毛が一晩で真白になる」((1)g)などは、生理学的事実とは対応しない、物語を通して得た誇張された知識である。

4. まとめ

本研究では、物語理解において恐怖が起こるメカニズムとメタファについて以下の3点を明らかにした。

第一に、怪談やミステリーは擬似的恐怖として、読者を刺激する。

第二に、読者は、ミステリーを読み進むにつれて主人公への共感、物語展開への予感が上昇し、一方で伏線に対して違和感があり、結末の恐怖事態によって違和感は解消した。

第三に、恐怖の心的状態は、身体に関わる慣用句、擬態語、メタファで記述される。これらは、生理的変化を基盤として構成された知識や経験に依拠している。

引用文献

- Apter, M. J. 1992 *The dangerous edge: The psychology of excitement* N.Y. : Free Press 山岸俊男(監訳) 1995 デンジャラス・エッジ:「危険」心理学 講談社
- Ekman, P. & Friesen, W.V. 1975 *Unmasking the face*. NJ: Prentice

- Hall, 工藤力 (訳編) 1987 表情分析入門 誠信書房
- 飛田良文・浅田秀子 2002 現代擬音語擬態語用法辞典 東京堂出版
- 石川喬司 1992 逢いびき 日本推理作家協会編 57人の見知らぬ乗客 講談社文庫
- 小松和彦編 2003 日本妖怪学大全 小学館
- 米田英嗣・仁平義明・楠見 孝 2005 物語理解における読者の感情：予感、共感、違和感の役割 心理学研究, 75, 479-486.
- 米田英嗣・平知宏・常深浩平・楠見 孝 準備中 物語理解過程における登場人物に対する読者の感情変化
- Kövecses, Z. 2000 *Metaphor and emotion: Language, culture, and body in human feeling*. NY: Cambridge University Press
- Kövecses, Z. 2005 Emotion concepts: from anger to guilt. A cognitive semantic perspective. *Psicopatologia Cognitiva*, 3, 13-39.
- 楠見 孝 1995 不確実事象の認知と決定における個人差心理学評論, 37 [3], 337-366.
- 楠見 孝 1996 感情概念と認知モデルの構造 土田昭司・竹村和久 (編) 感情と行動・認知・生理 誠信書房 (pp. 30-54)
- Lakoff, G. 1987 *Women, fire, and dangerous things: What categories reveal about the mind*. Chicago: University of Chicago Press 池上嘉彦・河上誓作ほか (訳) 1993 認知意味論：言語から見た人間の心 紀伊國屋書店
- Miall, D. S. 1989 Beyond the schema given: Affective comprehension of literary narratives. *Cognition & Emotion*, 3, 55-78.
- 水藤新子 2005 恐怖を喚起する表現とは：「新耳袋」を対象に 表現研究, 82, 27-32.
- 中村 明 1993 感情表現辞典 東京堂出版
- Öhman, A. 2000 Fear and anxiety: Evolutionary, cognitive, and clinical perspectives. In M. Lewis, J. M. Haviland-Jones (Eds.) *Handbook of emotions* (2nd Ed.) NY: Guilford Press (pp.573-593)
- Zuckerman, M. 1994 *Behavioral expressions and biosocial bases of sensation seeking*. New York: Cambridge University Press

付記

本稿は、第42回 表現学会 全国大会 シンポジウム「表現としての恐怖・怪異：その本質と諸相」における発表に基づく。シンポジウムを企画し、文献をご教示頂いた島根大学名誉教授田中登一先生、実験データを提供いただいた京都大学大学院博士課程の米田英嗣君ほかの皆さんに感謝します。また草稿に対して、米田君、中本敬子さん、中谷求仁さんには、貴重なコメントを頂きました。記して感謝します。(京都大学)